
NARUTO ~ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者~

?魔歩?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

NARUTO ～ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者～

【Nコード】

N8073W

【作者名】

？魔歩？

【あらすじ】

幼い頃、バケ狐の事件によって両親を無くしてしまった主人公。

そんな両親の形見と言ったら小さい時、我愛羅とお揃いで貰った青いペンダントに十尾の封印物だけだった。

設定です

設定からやりたいと思います!!

天野璃南（璃南 莉奈）

- ・ナルトの義理の姉でもあって、十尾でもある。
- ・尾獣にもなる。ナルトが赤の狐となり、莉奈が水色の龍になる。

【性格】

- ・誰に対しても優しく、笑顔を絶やさない。
- ・怒る時は半端無く恐ろしい w w w

【容姿】

- ・黒髪でいつもポニーテールかサイドテールにして縛っている。
- ・瞳は澄んだ緑色。

【服装】

- 黒と紫をモチーフにした感じで…
- ・短丈T & amp; ボーダータンク（黒 & amp; 灰色）にサルエルパンツ（黒）を着用。
- ・マツリが腕に付けてた…ガードみたいなのを付けている。

【能力】

- ・五大性質、医療忍術を使う。
- ・写輪眼、白眼に似て【劉冬眼】*【龍樺眼】を使用する。
- 砂漠の我愛羅と同じ特質で【水】と【氷】と【草】が盾となる。

【口寄せ】

リクとしてポケモンのエンテイ、ライコウ、スイクンを口寄せする。

三体の前足（右側に）木の葉の額当てがある。

・ドラゴンも口寄せをする。

・熊

・鳳の鶯鷺州

・龍のゼシル

劉冬眼について

劉冬眼はテレパシーにもなったり、耳と目を通じて実際にその場の話や映像を映し出される。

未来を見る事も出来るから戦闘中にはすごく役立つ。

龍樺眼

万華鏡写輪眼と似て、相手に幻覚を見せる。

龍樺眼はどんな強力な相手でも一発で死なせる事も出来る。

闇月ナイト

・璃南、歌怨と同じスリーマンセルの一人。

・チーム1の俊足でもある。

・片手でも印を結び、容赦無く戦う。

【性格】

・毒舌な所もあるけど、シカマルのようにめんどくさがりな一面も。

・嫌いなものは”弱い奴”

【容姿】

・多分ですがポケモンの謎の人物だったかな…その人似。

【能力】

・属性が”炎”と闇でもあって火遁をほとんど使う。

・血継限界の血が少し流れている。

【口寄せ】

- ・主に狼など野獣などを口寄せする。

音殺歌怨

- ・右頬には何かの紋章みたいなものがある。（ジェラール似）
- ・サクラみたい人に人一倍の観察力と洞察力を持っている。
- ・怒る時は物凄い殺気を出す。
- ・結構強い

【能力】

- ・主に属性は闇と雷。
- ・うちは一族では無いけど写輪眼や万華鏡写輪眼を使用する。
- ・霧もたまに使う

【口寄せ】

- ・悪魔などをも口寄せする。（w）

【第11班の司令官】

雨野マコト

- ・天然な所もあり、時間にはいつも遅れる。
- ・凶星になる事もしばしば；；
- ・だが、特訓・任務になると厳しくなる。

【容姿】

- ・中忍試験の時の音隠れの額当てをした大蛇丸に似ている。

【能力】

- ・……不明。

主人公たちについて

天野莉菜

・ナルトの義理の姉でもあり、十尾の妖龍を体内に封印している。
天野一族の子孫でもあって、良く劉冬眼を使用する。

三体のライオンを口寄せし、戦闘。

始めての任務でも劉冬眼を活かし、チームをまとめていた。

両親を殺した張本人がナルトの体内に封印されている九尾だと知っていても明るく振舞っている。

我愛羅との関係は、幼い頃、母親と砂の里に任務で言った時に出会った。（そこは本編で書きます！）

数年後、再開してから我愛羅の行動を可笑しく思う部分もあった。

だけどそれでも我愛羅が心配という優しい性格の持ち主だった。

そして天野一族の血型で、死者を蘇らせられるということも出来る
すごい能力の持ち主だった。

だが生き返らせる為の条件では、【その者を思う優しい心】で、その者を思う気持ちで蘇らせる力が変わるのだった。

閻月ナイト

片手で印を結び、息の根を止める程まで戦うのが自分流。

たまにM。他の人たちには冷たいがチームの人たちには優しい。

主に狼など野獣を口寄せする。

第十部では狼雷暴を口寄せし、闇月一族の忍法、『闇月忍法・豪華水煙？轟』を使う程だった。

だが、実際の力はこれを遥かに超える想定外のチャクラ量を放出するのだった。

莉菜を信頼していて主に心を開いている。

そして歌怨とはライバル関係（そう思っているだけ）であるらしく、最初は気が合わない…と思っていたまでだった。

また、マコト先生に始めて出会った時も敬語ではなく、タメだった。

音殺歌怨

クールで静かな性格（？）

影を自由自在に操る事も出来て、黒い霧で姿を隠す事もある。

001*忍術学校!!!

始めまして天野璃南です。

両親を無くしてから13年。

私はそれでも挫けずに義理の弟でもあるナルトと頑張っています!!

お父さん・お母さん、天国で私達を見守っていて下さい!!!

良く劉冬眼の練習で過去を見た事があって…話によれば、ナルトのお父さんと私のお母さんが兄妹だったらしくて…クシナさんとお母さんは赤ちゃんが物凄く欲しかったらしくていつもいつも赤ちゃんの話をしていたらしいんだ。

お父さん（夜影ハヤト）は風影三代目様の孫であってお母さん（天野屢樺）は雨隠れの里のくノ一だったらしいの。

余り昔の記憶は覚えてないけど…この青い氷のようなペンダントが私を守ってくれるらしいの。

お母さんが私を守ってくれるように氷と水を用いてペンダントを亡

くなる数日前にくれたんだって。

「ナルトの部屋」

璃南

「ナルト。起きて」

そんなナルトは夢を見ているらしく、寝言を言っている。

ナルト

「もう…食べれないってばよzzz」

（はああああ…やりですか。）と心の中で言い、印を結んだ。

<<影操り>>

ムクツとナルトの上半身が90ピタシになって座っていた。

ナルト

「ハハハハ…；；；璃南姉ちゃん（滝汗）」

璃南

「ナルトへ言へ貴方は何時になったら起きる気？」

ナルト

「ゴメン！！だって夢のラーメンがすごくおいしくて…つついっ
」

璃南

「言い訳無用」

<<頭叩き起こしの術>>

そう印を結び、言っとナルトは自分の手で自ら頭を叩いてた。

それが私自作の頭叩き起こしの術。

以前前にも忍術学校の入学式で遅刻しそうになった時、私自作のこ
の技を編み出した訳ですwww

〓 I N 学校・教室 〓

璃南

「おはよー」

「「おはよー」」

いの

「やっぱり今日もサスケ君はかっこいいわね／＼／」

女2

「ナイト君だってかっこいいわよ／＼／」

女5

「それいっなら歌怨君もよおー！！！！／＼／」

サクラ

「何言ってるの！！サスケ君が一番よッ！！！！／＼／」

朝、来ると必ずこれ何だよね………

このクラスのほか、全員がナイトや歌怨やサスケに目が行くと言っ
か…

私もその一人の女ですが…そういうのは興味無いと言っか…www

「本当、サスケはうざいってだよ」

「……嫉妬、……まだまだ子供ねwやっぱり」

イルカ先生もやって来た事だし、皆席に戻った。

イルカ

「さて……いよいよ明日は卒業試験だな。毎年お馴染み”分身”の術のテストをする」

「ええええええ！！！！！！！！！！また分身！！！！！！！！？」

12

と、訳の分からない喧嘩が始まり…一人ずつイルカ先生に変化する
テストをやる事になった。

「IN次の日・卒業試験当日」

イルカ

「えー…名前を呼ばれた者から隣のクラスに来るように」

出席番号順で座る為、私は一番前に座っていた。

天野だしねww

そんな後ろの席はナルトとヒナタが座っていた。

ナルト

「今年こそ絶対に受かってみせるってばよ!!!!」

ヒナタ

「ナルト君。。。頑張ってね／／／」

ナルト

「おうwあつ、、璃南姉ちゃん、呼ばれてるってばよ」

璃南

「本当だ、ナルト、絶対受かろうね　じゃないとおじさん（一樂の）が私達の為にも作ってくれたラーメン、食べれなくなっちゃうよ??」

ナルト

「勿論だってばよおお!!!!!!!!!!!!!!」

ヒナタ

「璃南ちゃん、／＼頑張ってたね／／」

璃南

「うん　ヒナタもね　」

「IN隣の部屋」

ミズキ

「どうぞ（ニ）」

璃南

「お願いします…」

<<分身の術>>

<<ボオオオンッ！！！！>>

イルカ

「卒業試験…合格だ」

璃南

「ありがとうございますッ！！！！（涙）」

卒業試験が終われば、私は目にいっぱい涙の粒を溜めてイルカ先生から木の葉の額当てを受け取った。

それから…時は過ぎて…ほとんどの人が学校の中から出て来た。

私は日光の暑さに負けて、木の上に上りナルトが出るまでずっと待ってた。

何分間…何時間経ってもナルトは出て来なかった。

やがて生徒と親共々帰っていくけどそれでもナルトは出て来なかった。

流石に心配になった私はイルカ先生の元に移動した。

「IN職員室？」

璃南

「あの…イルカ先生…」

イルカ

「おや？璃南じゃないか。
卒業、おめでとう」

璃南

「ありがとうございます…じゃなくて…ナルト、知りませんか？
？」

イルカ

「ん？ナルト？？知らないぞ。試験に落ちて凹んでると思うんだ…」

璃南

「！！？…ナルト…落ちちゃったんですか？？」

イルカ

「ああ。所謂…分身は出せた物の中身が無い分身…だったからな…」

璃南

「そうですか…」

「今年こそは絶対受かってみせるってばよッ！！！」

「璃南姉ちゃん！俺が受かったら一緒に一楽のラーメンで祝うってばよッ！！！」

ナルト…あれだけ受かるって…受かってみせるって…

夕方では私は一旦、家に帰った。

ご飯を作って待ってたけど夜の23時を回ってもナルトは帰って来なかった。

<<劉冬眼ッ！！！！>>

『どういう事だっばよ…イルカ先生…』

血？大きな手裏剣？？

先生がナルトを庇ってる？？？

『ナルトー。その巻物をこっちに渡せ。お前がそんなの持った所で意味は無いんだよ』

この声…ミズキ先生？

まさか…木の葉の封印書をナルトが持ち出したの！！？

気づけば私は、劉冬眼で見た森の映像とかの確認をして誰も使ってなさそうな森にやって来た。

<<50M先・移動中>>

上忍が二人…ナルトが巻物を持って移動してる…てことは…ナルトが危ない。

何としても助けなきゃ…。

風を切るかのように私は猛スピードで向かった。

（キイインッ）

手裏剣がぶつかりあう音がする…。

様子を見る為、私は近くの高い木の上で様子を見た。

ナルトがいない…イルカ先生とミズキ先生が戦ってる…

それにイルカ先生が血だらけ…どういう事??

そして…イルカ先生が痛みの余り、倒れた。

それで九尾の封印がナルトのお腹に浮かび上がった。

璃南

「……………」

ミズキ先生が最後のクナイで決めようとした時、ナルトがミズキ先生を殴り返した。

（ ）

ナルト

「分身…が…出来たってばよーッ！……！」

璃南

「ナルトッー！……！」

その声にビクッと身を震わせるナルト。

ナルト

「璃南姉ちゃん…その…（汗）」

璃南

「怒りたいのもあるけど…これでナルトも卒業試験、合格だね（にこ）」

ナルト

「…え…？」

イルカ

「ああ。璃南の言つとおりだな。…てかいるなら手伝いに来てくれよ」

璃南

「えーwww木の上で観戦してた方が良かったかなーとwww」

イルカ

「全く…だけどナルト、卒業おめでとう」

そういつて額当てをナルトに差し出すイルカ先生。

私も優しい笑みを浮かべてナルトを見つめる。

ナルトは大泣きをしながら抱きついて来た。

璃南

「ナルト」。イルカ先生は負傷中だよwww」

ナルト

「わわわわ（汗）悪いってばよッー！！！！イルカ先生ー！！！！！」

イルカ

「アハハハハハ」

璃南

「って治療しないと！！！！先生、本当に死ぬよ？」

イルカ

「それだけは駄目だッー！！！！璃南頼む！！！！直してくれ！！！！！」

ナルト

「イルカ先生ッー！！！！死なないでってばよー！！！！」（抱）

璃南

「アハハハ」

お母さん…お父さん…アカデミーの卒業試験、合格したよ

これからも私達を見守っていて下さい

002*チーム発表&初めての任務はBランク!!?†前編†

あれから…楽しい日々は過ぎて今日は下忍としての説明会が行われた。

勿論ナルトはそれまで額当てをせずに大事にしまつて置いた。

そんなナルトは今日、ノリノリ状態

ナルト

「璃南姉ちゃん!!俺つてば似合つてる???」

璃南

「んー…どうかなー??」

ナルト

「ええー!!!!(泣)だけどさ!!だけどさ!!今日から下忍なんだよな」

璃南

「ナルトもようやくアカデミー卒業したしね
一楽のおじさんもすごく喜んでたよね」

ナルト

「そうそう!!」「ナルトも、やっと合格か」
「何て泣いてたっ
てばよな!!!」

璃南

「それ程ナルトは子供だったって事だよね」

走り出す私。

ナルト

「子供じゃないってばよッー!!!」

と言い、その後を追うナルト。

だけどナルトは少しだけ成長したかもね

「INアカデミー」

ナルト
「　　」

璃南

「それ程嬉しいの？」

隣同士で座る事となった私達。

その窓側にはサスケが座っていた。

ナルトがどうしても”サスケの横は嫌”って言って何故か私が真ん中に座る事となって… w w w

そんな中でも他の女子達は誰が座るかとかで喧嘩中。

ナルトは御構い無しに変な不気味な笑みを浮かべる。

ナルト

「やっと下忍だってばよーニヒヒー」

??

「うわwww何変な笑みを浮かべてんだよwwwてか何でお前がここにいんだよ??？」

ナルト

「シカマルうゝこの額当てが目に入らないかってばよ????」

シカマル

「マヂかよ…お前、合格したのかよ。めんどくせえー」

奈良シカマル

口癖は「めんどくせえゝ」らしいんだけど……

シカマルの主な属性は影。

奈良一族では「陰操り」「影真似」など使うんだ。

ナルトは良くシカマルと一緒にいて、つい最近まではキバ、チョウジ、ナルト、シカマルの4人でイルカ先生に怒られてたぐらいなんだwww

それ程、ナルト達は義務教育上大変だったらしいの……

私が熱で寝込んでた時も学校から連絡があつて、「ナルト君が君を殴ってます!!お姉さん!!どうにか止めてください!!!」
「って本当、声からして大変そうだったけどね…。

いの

「やっぱ額当て姿のサスケ君もかっこいいわね／＼／＼」

女3

「それ言うならナイト君もよー!!!／＼／」

女2

「何言ってるの!!!歌怨様が一番よー／＼／」

三人（サスケ・歌怨・ナイト）

「睨」

「キヤアアアアアアアッツツ!!!!!!」

ああ…逆効果だったね……

イルカ

「はいはい。五月蠅いぞー。席に着けー」

「はぁーい」

イルカ

「まずー…卒業おめでとう。これからは木の葉の忍びとして役に立てれる様頑張る事だ」

「はぁーい!!」

イルカ

「よし。今日、ここに呼んだのは三忍一組での班を作る事だ。

これから先、任務をこなして行く上でその三忍一組で協力をして強くなっていくんだ。

そして割り当てられた上忍の先生とも絆を深める事だ。」

「はぁーい」

イルカ

「名前を呼ばれた者は返事をするように」

「……第七班。うずまきナルト、春野サクラ、うちはサスケ」

何か…ナルトの反応が面白いwww

「「第十一班。天野璃南、闇月ナイト、音殺歌怨。以上の三名だ」」

ナルト

「闇月???音殺???」

え?何か女子は羨ましそうな瞳で見えて来て、男子は目が死んでるんですけど…www

イルカ

「もう少ししたら上忍の先生が来るから、それまでに待機するよう」

そついい、そろそろと上忍の先生が入ってきた。

「「第一班の者」」

そして…教室に残ったのは…

ナルト

「遅いつてばよッー!!!」

ナイト

「黙れ。ウスラトンカチ」 W W W W W

ナルト

「何ー!!!?」

サスケ

「ボソ」ウ斯拉トンカチ…二人」

これは聞かなかった事にしといてもいいのかな… W W W W

サクラ

「何してるのかな…」

後残ってるのは第七班と第十一班のみ。

退屈して来た W W W

（（ガラガラッ

????

「すまない。遅れた。第十一班の者は？」

璃南

「あゝ、はい」

何故か私達三忍はジャンプして教卓の手前で着地した。

????

「すまない……では行くとするか」

ナルト

「なッー！！！！俺達の上忍まだー！！？」

教室の向こうでナルトが叫んでいたのにも関わらずナイトは「「バタンッ」」と閉めた。

「IN噴水」

????

「任務で少々遅れたが……自己紹介から……とするか」

歌怨

「まず、貴方から名乗って下さい」

???

「そうだなw俺は雨野マコトだ。好きな事は…無いな。嫌いな物は…特に無いな」

ズコッ。

ナイト

「結局分かったのって名前だけだろ」

マコト

「ハハハ。まあ次はお前達の番だ。左端からだな」

歌怨

「音殺歌怨。好きな事・嫌いな事を教える気は無い。
俺の野望はある男を”殺す”事だ」

マコト

「(…やはり…)次」

璃南

「天野璃南です。好きなというより…大事な人がいます
嫌いな事とかは…今はありません」

マコト

「（十尾の少女か…）次…って最後かw」

ナイト

「闇月ナイト。嫌いな者は五月蠅い奴に弱い奴だ」

何か…悪意のこもった自己紹介だね…;

マコト

「歌怨に璃南。ナイトだな^^よし。早速明日は任務という事だな」

璃南

「え???早速任務何ですか???」

マコト

「ああ。お前達三忍はアカデミーでの能力を見た限り、下忍とは思
えない程の実力だ。

それにこの任務は火影様からの案でもある」

ナイト

「んで、何ランク？」

マコト

「Bだ」

「「B!？」」

マコト

「主に警護だな。今回の以来内容はある人物を無事に家までお届けする事だ」

歌怨

「案外…すごいな」

マコト

「だろう。Bランク共言えども中忍・上忍向けの任務だ。

それにこの任務には深い意味は無いと思ったら大間違いだ。

この任務を通してこの四人の仲を深める事も大事だ。

一人一人が自分勝手な行動をせずに、仲間を助ける思いやりの気持ちも大事だ」

「「はい」」

マコト

「よし。今日は一旦解散…だな^^」

「「ありがとうございました」」

と、言いそれぞれ散らばる。

「IN家」

冷蔵庫に張られた紙を見た。

『璃南姉ちゃん。』

今日はカカシ先生の家で泊まるってばよ。

明日には戻るってばよ。それじゃーおやすみだってばよ
』

璃南

「明日…か…私も朝早く出かけるんだよね…」

私はナルトが書いた手紙の下ラ変にも書いた。

『ナルトへ。』

そっか。帰って来たら感想を教えてね

それと今日は任務で留守なので、冷蔵庫の中に牛乳が閉まってあるし、

戸棚の中にもカッププラーメンがあるからそれを食べてね。

それと人には迷惑を掛けない事』

それだけ書くと私は自分の部屋に入って行っただ。

明日の…って言ったとしても期間は一週間になるかもしれないしね…忍具とかも沢山いるだろうし。

時は過ぎて…次の日。

朝早く起きて木の葉の門前に向かう。

そこが待ち合わせ場所になってるのにも関わらず…一時間経過。

歌怨

「上忍はまだかよ…」

璃南

「…はああああ。」

ナイト

「……………あんな上忍が俺らの先生でいいのかよ……」

璃南

「…多分大丈夫…かな？」

歌怨

「疑問になってるぞ」

璃南

「アハハハ…」

沈黙になった数分後、風と共にマコト先生ともう一人、年老いたおじさんがいた。

マコト

「いやゝ遅れた。すまないな」

歌怨

「今回、警護するのはそちらの方ですか？」

ナイト

「しかねえーだろww」

マコト

「まっ、そういうことだな。船橋さん。こちらが私の部下共です」

船橋

「こんなガキ共に任せてもいいのか？？」

ナイト

「なッ！？」

船橋

「よっぽどの實力だと聞いたんじゃが…」

歌怨

「……ナイト。落ち着け」

今にでも飛び出しそうなナイトを歌怨がナイトの影を踏み付けた。

マコト

「まあまあ。そこまですて行くのでしょうか。」

明日の朝までには国の方まで届けなければ行けない訳だからなあ」

と言い、歩き始めた。

何故か私達三忍が前に行く事となり、真ん中には舟橋さん。

その後ろにはマコト先生が着いていた。

ナイト

「ボソ」何だよ。船橋って人。まるで俺ら忍びを馬鹿にしてるみてーじゃんかよ」

歌怨

「そう思うのは仕方ない事だ。俺達は俺達。船橋さんは船橋さん。思考能力は人それぞれだ」

ナイト

「何だよそれ…天野はどう思う？」

璃南

「んー…確かに人それぞれっていうか…」

ナイト

「お前も歌怨の方がよ…つまんねえーの」

歌怨

「任務に集中したらどうだ？」

ナイト

「やんのか？」

璃南

「はいはい！！終わり！！！！任務中に喧嘩してどつするの！！！！」

船橋

「溜息」

マコト

「呆」

璃南

「ボソ」微妙に船橋さんにも舐められちゃってるし…」

ナイト

「ボソ」アイツのあの顔、気に入わねえー」

璃南

「だからって殺しちゃ駄目だよ!!」

ナイト

「これも任務。殺しちゃ意味が無くなるだろ」

貴方は何が目的なの？と私は聞こうとしたけど聞かない事にした。

進む事、数時間。

只今・昼食準備。

私と船橋さん以外、岩だらけの片隅で昼食の準備中。

私は主に魚とかを吊るしてる訳なんだけど…

まず火が無いと出来ない訳だし…私は水と氷なら出せるけども…

あー…どうしよう…と、困ってた時に…

ナイト

「どけよ。じゃないと、火傷するぞ?」

私はすぐさまどくと、口に手をあてて片手で印を結んだ。

<<火遁・火柱の術>>

中火ぐらいの炎でみるみるうちに火が大きくなって行った。

璃南

「あつ、ありがとう。後は…塩とかか…」

ナイト

「塩なら…確か…」

マコト

「ほら。塩だ」

手で受け取るよりも先に水が受け止めては私の手の上に載せてくれた。

歌怨

「…今のは…」

璃南

「ああ。今の水の事？」

ナイト

「すげーなww」

璃南

「ありがとう／＼これはお母さん達の形見というか…私を守ってくれるようにしてくれたの」

マコト

「成程…つまりは無傷という事になるのか…」

璃南

「はい」

後編に行きます

003*初めての任務はBランク!!? †中編†

マコト

「そういう人がチームにいてくれると楽しいな」

璃南

「ありがとうございます」

とまあ焼けた魚を食べながら作戦を練っていた。

いつ、敵に襲われても可笑しく無いように…という事らしいの。

ナイト

「そついえば…どこに届けんの？」

マコト

「雷の国・雲隠れの里だ。そこには沢山と言っても良い程に忍びがいる。」

火影様から聞いた話では狙われている…という事でしたが…」

船橋

「……………そこまで聞いていたんじゃない……………」

（ここからは波の里と似るかもしれませんぐく）

歌怨

「どついう事ですか？」

船橋

「イチガコーポレクション…ガトー海運会社並の金持ち会社の奴らなんじゃが…」

つい最近、わしが持つペンダントを狙っておるんじゃないよ…それがこのペンダントじゃよ」

ナイト

「何だこれ…紫色で光ってて逆に眩しい」

船橋

「だが…話によれば、ある一定の人物にしか効果が発揮しない…らしいんじゃない」

璃南

「一定の人物？…とは？？」

船橋

「それは…おm（キイイイインッ」

歌怨が食べようとしていた魚に手裏剣が刺さっていた。

毒入りの手裏剣だったのか…魚がすぐ黒くなった。

船橋さんは急いでペンダントを隠すけど、手裏剣を連発で投げつけられるのも、私は船橋さんを庇い、その上から水が守ってくれていた。

ナイト

「何なんだよ…てか何気に無傷だし」

璃南

「それが、水の能力なんだもん…」

歌怨

「来るぞ」

今度は炎で焼かれそうになったが氷が大きな盾となって私達五人を助けてくれた。

????

「チッ。早く死ねよ」

マコト

「大丈夫か…」

璃南

「何とか…」

ナイト

「天野の氷で何とか助かった」

歌怨

「まさか敵がさっきの船橋さんの話を盗み聞きしてたのか??」

マコト

「その通りだな。すぐにここから出発するぞ」

何とか脱出し、早足で向かっている途中。

璃南

「（やっぱりBランクは難しいね…いつ、どこから敵に襲われるか分からない訳だし…）」

マコト

「……………」

歌怨

「……………」

ナイト

「……………」

船橋

「……………」

その後、重苦しい空気の中、私達は進んだ。

だけど…行く先も…さっきから同じ道を通っている気がする…。

マコト

「嵌められたな…」

歌怨

<<写輪眼>>

マコト

「写輪眼か…どうだ？分かった事は？？」

歌怨

「……………多分…幻術だ。」

「けどこの幻術は写輪眼では見切れない」

ナイト

「どういう事だよッ！……！」

船橋

「……」

璃南

<<劉冬眼>>

マコト

「（劉冬眼……やっぱり十尾の少女だな……）」

璃南

「……50M先、出口ある。
少し行った先には敵がざっと7人」

マコト

「よし。歌怨、ナイト。戦いの準備をしておけ。
そして璃南。そのまま劉冬眼を使っているのか。
いつ敵が襲ってくるかが分からない訳だ。
それと船橋さんの近くにいて、守るんだ」

璃南

「はい!!」

ナイト

「殺しても良いんだよね？」

マコト

「・・・まあ良いだろう」

歌怨

「そんな事を聞いたとしても最初から手加減無しで行こうとしていただろ」

ナイト

「ケツ。まあそんな所だな」

璃南

「…敵、続出」

マコト

「行くぞ」

走り出すのは良いけど…船橋さんがすごく辛そう。

璃南

「後10M」

三忍はクナイを用意し、先に走って行く。

少し先からは戦う音がトンネルのそこまで響き渡っている。

数分して…マコト先生がやって来た。

マコト

「こっちは終了だ。どうだ？」

璃南

「……敵は雷の国周辺にいます。
今は何とか大丈夫だと思います」

マコト

「そうか。船橋さんもお無事ですか？」

船橋

「ああ。大丈夫じゃ」

ナイト

「……マコト先生。
もう少し進むのか？」

マコト

「まだ昼間だが……ここら辺で野宿とするか。
お前達もさっきの戦いで術の使いすぎで疲れているだろう」

歌怨

「ああ。傷も結構付けられたしな……」

船橋

「だがここら辺で野宿して襲われるじやろう……」

マコト

「安心して下さい。こちらでも幻術で寝場所を隠します」

そういうとマコト先生がテントを作り、幻術で見事に隠した。

ナイト

「あー……痛ってー……」

バッグを置くと、治療中のナイトの所に向かった。

璃南

「やるよ 絆創膏とか、貸して」

ナイト

「……ん」

消毒中… 大人しく静かにしてくれてやりやすかった。

璃南

「はい。後は絆創膏を上から張るだけだね」

冷たい冷たい氷で冷やした絆創膏を張ったら絶叫した。

ナイト

「貴様ツ（泣）俺が炎の属性だという事を知ってて… ひでえ（泣）」

璃南

「だってね、今の毒針があっただよ？

まあ私が医療忍術を使わなくとも何とか戻ったけどさ」

ナイト

「天野ってさ…結構Sだったりして」

璃南

「ナイト（怒）もっと氷で冷やそうか？」

ナイト

「あー！今…（ナイトって…／＼／＼）」

璃南

「ん？？何？？」

ナイト

「何でも無い。」

馬鹿話をしてたら行き成り（（ボタンッ））という音がした。

マコト

「おい！！歌怨！！どうした！！」

船橋

「腕が黒くなってるわい…」

マコト

「大変だ…毒が体に回ってるぞ」

璃南

「マコト先生！！ここにのせてください！！！！医療しますので！！」

マコト

「出来るのか！？」

璃南

「任せて下さい これでも私は死者を甦らせれ増したし、」

そついうと先生が歌怨を私の前に運んだ。

そのまま左腕にチャクラを集中させた。

私の気持ちに反応したのか…氷が歌怨の額近くに執着し始めた。

マコト

「助かるのか…??」

璃南

「はい。今の所、毒は少しずつただけで収まっています。

それに氷で頭を冷やしてるから早くすれば明日の朝までには治るはず…」

ナイト

「お前、いろんな意味ですげえーなwww」

璃南

「あ、ありがとう？」

ナイト

「素直に喜べよ」

璃南

「いやーwww”いろんな意味で”ってどんな意味？って思って……」

「

ナイト

「天然だな（笑）」

璃南

「ちょっと笑わないでよー（泣）」

ナイト

「だつてなーwww」

そんなやりとりをマコト先生が呆れ顔で見ていた共知らずに私達は楽しんでいた。

004＊初めての任務はBランク！！？
†後編†（前書き）

雪の国・雲隠れの里まで無事に船橋さんを届ける事になった私達。

忍術学校を出て間もないのに初日からBランクという上忍・中忍レベルの長難関任務でもあった。

そんな矢先に・・・イチガコーポレクションの忍びだと思われる奴らに狙われた。

そして、無事ナイト・歌怨・マコト先生のおかげでもあって私達は何とか脱走したものの、森の中で歌怨が倒れた。

医療忍者でもある私は7人で十分そうなテントで歌怨を治す事に。

そしてマコト先生の幻術で私達は一晩無事に過ごせる者…

004*初めての任務はBランク!!? †後編†

ナイト

「歌怨・・・治ってるか？」

璃南

「もつじき・・・日も暮れるし治るよ」

ナイト

「へへっ・・・そうか」

璃南

「休まないの？」

ナイト

「同じスリーマンセルの奴が倒れてんのに休めれるかよ」

璃南

「・・・優しいね」

ナイト

「そうか？」

璃南

「つい最近まで私達は喋っていなかったのね・・・」

マコト

「そうだな」

2人

「！！！」

マコト

「だが。その経験はこの第11班の戦力にもなるの、知ってたか？」

ナイト

「どついう事だよ・・・」

マコト

「簡単な話だ。劉冬眼を使う璃南に。
写輪眼を使い、雷を身に纏う歌怨に、
片手で印を結び、血継限界でもあるナイト。
俺達4人が力を合わせれば出来ない事は無い」

ナイト

「たまにはカッコイイ事を言っね」

璃南

「流石は上忍・・・だね」

その時だった。

歌怨が頭を抑えながら起きだした。

歌怨

「ここは・・・?？」

璃南

「起きたー!!!（抱きつく）」

私はすごく嬉しくて思わず抱きついた。

歌怨

「何だ???」

ナイト

「璃南の奴。一晩お前に付きっ切りで看病をしてたんだぜ（ニカッ）」

船橋

「なんじゃなんじゃ。騒がしいのー」

マコト

「船橋さん。歌怨が復帰しました。
これで出発出来ます」

歌怨

「璃南、すまなかったな」

璃南

「うっん。私達同じスリーマンセルでしょ」

ナイト

「だな」

ナイトが拳を作りながら前に出した。

ナイト

「お前らもやれよ（二カ」

歌怨もやった所で私もやった。

マコト

「おつ。俺も混ぜろ。船橋さんもやりましょう!」

船橋

「あゝ、ああ」

マコト

「よし。この絆に誓って…絶対船橋さんを無事に送り届けるぞ!!」

「「ああ!!」はい!!」」

そして・・・

私達は雪が積もる中、敵に見つからないのかと心配な気持ちを抑えながら歩いた。

船橋

「あそこじゃ！―雪の国は―」

ナイト

「おっしゃー！―！（小声）」

マコト

「お前達。気をつけて繋れよ」

「「はい／ああ」」

《劉冬眼》

さつきからどうも嫌な予感しかしないんだよね・・・。

璃南

「マコト先生！…トラップが…」

するとナイトとマコト先生がクナイを出した。

ナイト

「だろうな。めんどくせー」

???

「はっはっは。流石は忍者じゃ」

歌怨

「この声は…!?」

船橋

「…イチガじゃ…!!」

ナイト

「おい!! 糞じじい!! 隠れてねえーでさっさと出てきやがれ」

??

「糞じじいじゃと?」

そう言った途端、雪の中から10忍ほどの中忍だと思われる忍者が出て来た。

その後、白ひげのおじさんが後ろから現れた。

イチガ

「おうおう。怯えてるのー」

ナイト

「勝手に言ってる。糞じじい」

イチガ

「ガキが。今の内にほざいてろ」

キャラがー！！！！

ナイト

「悪いけど俺ら任務中でな」

マコト

「どうやら中忍が10人・・・という所だな。お前たち、いけるか？」

歌怨

「行けるかもな。璃南は余り舟橋さんから離れるな」

璃南

「了解」

そしてイチガという人が腕を下ろした時、忍者達が一気にやって来た。

ただど歌怨・ナイト・マコト先生達にそれぞれ三忍の忍者がいて、こっちには4忍もいる。

殴ろうとしても交互に氷と水が盾となって船橋さんと私を守っていた。

2

「何だこれは!!!!」

璃南

「船橋さん!!絶対私から離れないで下さい!!」

船橋

「ああ。。」

璃南

「ありがとうございます、水遁・簾縛水!!!!」

すると雪の中から水が出て来ては4忍の忍者を捕らえ始めた。

璃南

「悪いけど・・・はあっつ！！！！！！！」

そういうと、四人の忍者らは血まみれとなって消えた。

船橋（啞然）

璃南

「船橋さん、すみません……
貴方を守る為なので……」

するとマコト先生も歌怨もナイトも中忍レベルの忍者達を倒した。

船橋

「イチガ！！何故わしを狙うんじゃ！！！！」

イチガ

「何故だど？それはお前が憎いからだ（（ドサッ）」

その途中、マコト先生がとどめを差した。

マコト

「憎い・・・か。」

歌怨

「終わった、のか？」

ナイト

「ヤッファー！！！」

船橋

「終わった、、んじゃなー！！！」

マコト

「ああ。お前達もよく頑張ったな。中忍にあそこまで刃向かうとはなー……」

璃南

「はい」

ナイト

「どうなるかと思ったぜ」

歌怨

「最終的には船橋さんが無事でなによりだ」

マコト

「よし。船橋さんを無事に送り届けるぞ……！」

「そして……帰り道・船橋さんを無事に送り届け……」

歌怨

「どうなるかと思ったが……無事に終わったな」

ナイト

「だな」

マコト

「にしてもお前達は強いな。今の所、順調に成長しているのは…
璃南だな」

璃南

「やったー!!! ナイトより成長してる」

ナイト

「ええ!! 俺じゃないのかよっー!?!」

マコト

「璃南だな。歌怨が次だな」

歌怨

「フンッ」

ナイト

「何でー!!!! (ガビン」

「アハハハハハハ!!!!!!」

雪の積もる道のりで…私達の笑い声がこの雷の国で響渡っていた。

005*我愛羅!!?(前書き)

初めての任務が終わり、今度は修行に励む三忍は・・・

005* 我愛羅!!?

マコト

「マスターが早いな。それに三忍とも、体術・幻術・忍術もきちんと上昇してるな」

ナイト

「絶対負けられないしな」

あれから…Bランクの任務が終わって数週間。

私達はいろんな任務をこなして来た。

時にはCランクもやつたり…Dランクもやつたり…Bランクはもう一度やって…一日に2回ぐらゐは任務に出かけたまでだった。

そして…私達は腕を挙げる為”幻術・体術・忍術”の特訓をしている。

マコト

「初日に比べて良く腕を上げてるな」

ナイト

「おっしー!!」

歌怨

「まだまだ行けるな」

璃南

「うん」

マコト（あれは…もうこんな時期か…）

「あー、悪いが俺は用が出来た。てことで解散」

そついい、マコト先生はどこに行っちゃった…

璃南

「ねえ、木の葉でも回らない??
ついでにお餅とか食べたり」

ナイト

「いいかもな 修行後の餅はサイコだ」

歌怨

「悪いが俺はm（「歌怨がないとスリーマンセルの意味が無い

でしょー」ちょー

私は二人の腕を掴んで歩きだした。

璃南

「あつー！あそこのお餅屋さんなんてどう？？」

ナイト

「おつー！行こうぜ」

歌怨

「おい……」

看板に誘われて角を曲がった時、足が止まった。

サスケ

「へえー砂漠の我愛羅ねー」

我愛羅

「俺達に行く……！！？」

ナイト

「何だアイツら???あの額当てからして砂の奴らだよな」

歌怨

「ああ」

璃南

「ナルトく、何してるの???」

私は歩きながらナルトの名を口にした。

サクラ

「あつ、璃南!!ちょっと聞いてよ……」

ナルト

「璃南姉ちゃん……」

木の葉丸

「ナルト兄ちゃん……弱すぎるぞ!!コレ!!」

璃南

「ちよつと一人ずつ言ってよ……」

そう言った時だった。

冷たい視線に気付いて、そっちの方を見ると我愛羅が私を見ていた。

サクラから事情を聞いて、私は三忍に向き直った。

璃南

「木の葉丸君がぶつかった事は謝ります。
だけど…中忍試験前に殺すようなそんな真似をすれば確実に貴方達
は一生下忍のまま。
だから大人しくこの場から離れて下さい」

テマリ

「……………」

カンクロウ（良い奴じゃん・・・／＼／＼）

我愛羅

「……………ああ。そのつもりだ。悪かったな。…璃南」

そついうと我愛羅達は消え去った。

だけど…どうして我愛羅は最後に私の名前を…口にしたのッ！…！

あの時…我愛羅は…

ナルト

「璃南姉ちゃん・中忍試験って何だっばよ???」

璃南

「下忍から中忍に上がるテストのような者だよ。もう少ししたら中忍試験が行われるの。」

それで各里から中忍候補の者がこの木の葉にやってくるの」

ナイト

「けど何で璃南が知ってたんだ??」

歌怨

「この間、マコト先生が言ってただろ」

ナイト

「そうだったけ?」

璃南

「その時、ナイト負傷で聞いてなかったただけだと思うww」

ナイト

「何だソレ」

「時は過ぎて…中忍試験当日」

ナルト達も中忍試験に出る事となり、私も張り切っていた。

（すみません…璃南 莉奈に変更です）

莉奈

「ナルトー、私先行ってるー」

ナルト

「了解だつてばよ」

印を結ぶと、風と共に消えた。

006* 第一回目のテストは筆記!!? (前書き)

- 何とか中忍試験の志願書を出す為に忍術学校に入った者の・・・

006*第一回目のテストは筆記!!?

莉奈

「始まるね。確か301だっけ」

ナイト

「おう。・・・って何やってんだ？アイツら」

歌怨

「・・・ただの幻術に過ぎない。先に行くぞ」

莉奈

「了解。ナイト、行くよ」

ナイト

「あつ、おい待てよ!!!」

私達は幻術で止まってる候補者達を見て、何も無かったように上の階に上る。

中忍試験の本会場でもある301号室前にマコト先生が出迎えてくれた。

莉奈

「あつ。マコト先生」

マコト

「ほう。上忍の幻術を見破ってここまで来たんだな。関心関心。流石は俺の教え子だ」

ナイト

「んで。先生は何をしに来たんだ??」

マコト

「志願書を持って来たな。それを貰いに来たんだ」

志願書を渡すと先生は微笑ましい笑顔を見せながら私達を送り出した。

中に入った途端・・・沢山の視線を浴びた。

莉奈

「無視」前の方に座ろうよ。うん。決まり」

どうせ何かを言われる前に私は二人の腕を掴んで中間ぐらいの席に

座った。

莉奈

「……………やっぱ他の席にs（）」「何だよ！！お前！！酷いじゃん！！！！」「何でいんの。。。」「

皆さん。お分かりでしょうか。最後の”じゃん”で。

砂の三忍組がいたコトに気付かなかった私…。

だけど＊カ＊我＊テ＊って感じたから良いんだけどさ…隣が我愛羅じゃないからさ…

こう見えても私。まだ我愛羅が少しだけ好き…だけど、認めたくない自分もいるというか…

歌怨

「まア良いだろう。もう席は空いて無いようだしな」

という事で＊歌＊ナ＊莉＊カ……………という順番に。

はア……。今日は付いてないかも

そしてさっきから溜息連発中。

カンクロウ

「お前・・・さっきから酷いじゃん？」

莉奈

「人生山アリ谷アリとかよく言うでしょ？それと同じ」

ナと歌（出たよ。莉奈の嘘作戦）

通用すると思ってたけど逆効果だった。

反対に頬被抓られた。

莉奈

「はなひえ！・・・ばひゃばひゃ！・・・（離せ！・・・馬鹿馬鹿！・・・）

」

「IN 4分後」

莉奈

「痛っーい（泣）何すんのさ！ー！！」

カンクロウ

「こっちは傷ついてるじゃん」

莉奈

「知らないよ。そんなの」

私は両頬を両手で抑えながら涙堪えていた。

ナイト

「大丈夫か？」

莉奈

「大丈夫じゃない。場所変わって」

ナイト

「はっ！？」

そういう事で私とナイトが入れ替わり…カンクロウとテマリが入れ替わった…何故に！？

テマリ

（結構良い男が二人もいるじゃない／＼／＼）

ナイト

（女って莉奈以外皆同じだ）

案外可哀想なナイトだったけど・・・その途中ナルトの大声によって我に帰った私

これから先の事を考えすぎて自分の世界に入ってた私www

ナルト

「俺の名はうずまきナルトだッ！！！！いずれ火影の名を受け継ぐ男だってばよ！！！！」

莉奈

「ボソ」あの馬鹿。一気に敵が増えちゃってるよ……ナルトラしくて良いけどね（えw」

歌怨

「だな」

〓IN数分後〓

サスケ

「ついでに天野莉奈についても調べてくれ」

カブト

「ああ。……彼女のチームには音殺歌怨に闇月ナイト。司令官の雨野マコト。

今分かるのはそれだけだ。全てが不明になってるよ」

ナルト

「流石は莉奈姉ちゃんだってばよ」

それから…第一回目の筆記テストが始まった。

莉（暗号…こうなるんだね…）

と、真剣にやっているとと思うけど…集中出来ない。

隣が隣だから

隣はなんと………カンクロウなんだよね……。

ますますついてない私。

だけど斜め前には我愛羅がいてその前にはナイト。

私の斜め後ろ左には歌怨とテマリが座っている。

確かカンニングをすれば、失格か持ち点から引かれる…。

だけどこんな問題、ナイトはほぼ解けないはず。

この間《筆記テストはお断りッ！！》とか言ってたし…それだったらナルトも解けないはず。

どうにかしてでも私達三忍の持ち点を減らさない方法…。

《忍者は裏の裏を読むべし》

裏の裏って何！？

裏…裏…

《忍者らしく》

忍者…

《裏の裏を読む》

…成程。そういう事ね。

《劉冬眼》

『ナイト。歌怨』

ナ『何やってんだよ（汗）』

歌『忍者は裏の裏を読むべし。だろ？』

莉『そういう事。私が答えを言うから。書いて』

ナ『流石は莉奈だな』

歌『頼む』

莉『了解。まず一問目はー…』

そうして…

ナ『解けた！！サンキュー、莉奈。歌怨』

歌『礼なら莉奈にするべきだ。何としてもこの試験は突破するぞ』

莉『了解』

ナ『勿論だ』

そして無事、第一試験・筆記テストも無事に終わり第二試験管の後に着く私達。

《死の森・前》

ナルト

「すげー・・・」

アッコ

「ここは通称・死の森よ。第二試験はこの森で五日間を過ごして貰うわ。」

その目的は天地両方の巻物を灯台に三忍で持ってくるのよ」

そして一旦解散となり、次の日。

歌怨

「早いな。誰が持つか？」

莉奈

「ここは…意外性No.1のナイトにする？」

ナイト

「はい？」

歌怨

「良いかもな。巻物を頼むな」

ナイト

「おい！！ちよい待てよ！！」

と、私達はそのまま巻物を貰いに行った。

ナイト《成程。そういう事か》

莉奈

「あつ、今の所空いてるのは44番だね」

ナイト

「マジで巻物誰か持てよ」

歌怨

「無視（）急ごう」

ナイト

「無視すんな（怒」

莉奈

「まあまあ（笑）ナイトが持ってたほうがこっちとしてはすごく助かるよ。（本当は私が持つてるけどね）」

「開始」

歌怨

「とりあえず、灯台に近い場所に向かうぞ」

二人

「ラジャー」

移動中、私が何かの気配に気がついた。

《誰かいるよ。後ろから来るよ》

《変わり身だな》

【変わり身の術】

私達は樹木を超えるとその影に隠れた。

影使いでもある歌怨が幻術で見破られないようにしてくれたんだ。

そして私達の分身が誰かに襲われた。そしてクナイで殺された…が…

（ボオオオオンッ

男

「チッ。どこに逃げやがったー！！！」

ナイト

「ひでえーやり方だなー」

男2

「チッ。地の巻物を持ってんのかぁ！？」

莉奈

「持っていない…って言ったらどうするの？」

男3

「殺すまでだッー！！！」

「飛ばして…灯台」

上忍

「ただいまのタイム・・・10分25秒29・・・です」

歌怨

「案外早く終わったな」

ナイト

「だな」

上忍

「天と地の巻物。両方持つてるな。後は好きにしてもいいぞ。第三試験会場にも向かってもらいたい」

莉奈

「いえ。弟達の手伝いに行きます」

ナイト

「何なんだよ！！毎回毎回！！待ってくれよ！！」

とかいいつも先に行くナイトって……

007*大蛇丸、現る!!?(前書き)

早くも天地両方の巻物を、獲得し灯台に急ぐ莉奈達。

一番のりで10分25秒29という在り得ないタイムで第二試験を終わらせた。

そして、ナルト達の上に急ぐ三忍であった。

007*大蛇丸、現る!!?

莉奈*（何なの・・・さっきからこの嫌な気配は・・・）

ナイト

「おい莉奈。どうしたんだよ。そんなに急いで・・・」

歌怨

「何かあったのか？」

莉奈

「分からない・・・でも嫌な予感がするの・・・」

【劉冬眼】

サクラ

『サスケ君！！！しっかり！！！！』

これは・・・？

莉奈

「音隠れ？・・・違う。あの人じゃない・・・じゃあ誰？」

????

『サスケ君は必ず私を必要とするわ』

莉奈

「・・・まさか・・・」

だけど・・・アンコさんが確か・・・確認したはず。

アイツが・・・大蛇丸がいるはずは無い・・・。

歌怨

「どうだ？」

莉奈

「もしかしたら、、大蛇丸がこの試験・・・いや・・・この死の森にいる！！！」

ナイト

「はあっ！？」

莉奈

「サスケに呪印が付けられた。急ぐしか無いよ。もしかしたらあの呪印が暴走しかねないよ！！！」

歌怨

「ああ。急ぐぞ」

ナイト

「糞・・・」

莉奈

「私さ。こういう時の為に新技を考えたの！」

ナイト

「新技？」

莉奈

「名付けて。超高速なんだよ。ちなみに私の忍法」

歌怨

「試す価値はありそうだな」

莉奈

「行くよ。莉奈忍法・桜蘭走權！！」

すると、三忍の足元が風のように速く走れるようになった。

まるで逃げ足が速い鷲のようにね。

ナイト

「おっ！！見えて来たぞ！！！」

莉奈

「あっ！！あれって音隠れの奴らじゃん！！！」

私は速度を上げて、リーさんがやられそうになった時、痩せ細った奴を蹴り飛ばした。

サクラ

「り・・莉奈っ！！！」

ナイト

「お前さー…弱すぎだろ？」

莉奈

「ちょっとナイト！！！！サクラだって頑張ったんだからそういう事

を言っちゃ駄目でしょ」

ナイト

「お前もそう思わねえーか？」

歌怨

「ただ単にお前が馬鹿で強いだけだ。」

莉奈

「歌怨に一票!!」

ナイト

「うわっ。ひっでー」

サクラ

「・・・私だつて・・・」

ナイト

「・・・まあお前もアイツらの為にも頑張ったんじゃないの。
そこまでして、守りたかった。そこは認めてやるよ」

莉奈

「素直じゃないね」

ナイト

「うるせえーよ」

サクラ

「／／／／／／／／／／」

歌怨

「それより、敵を怒らせてるみたいだぞ」

ザク

「糞女め・・・俺を蹴り飛ばしやがって・・・」

莉奈

「あつ、私？」

キン

「何なのよ!!」

莉奈

「普通の木の葉の忍びだけど？」

ナイト

「噛み合ってねえーよ!!」

莉奈

「そう? まあーいいや。私、三人の医療するから後はよろしく」

歌怨

「まあ良いだろう」

ドス

「キン！！あの女を捕らえろ！！」

キンという人が高速で向かったらしいけどナイトが片足で蹴り上げ、見事に樹木にぶつかった。

ナイト

「ここから先は行かせねーぞ」

歌怨

「まあ行かない方が身の為かもな」

ドス

「・・・2VS3。これじゃー、そっちが不利だな」

歌怨

「力ではどうやらこっちが上だな」

莉奈

「サクラも治療するから横になって」

サクラ

「いいの??行かなくて・・・」

莉奈

「大丈夫。あの二人は強いよ。あの二人なら・・・」

【影分身の術】

莉奈

「よし。これで三人に分ければすぐ治るよ」

サクラ

「私って・・・本当に弱いね・・・」

莉奈

「そんな事無い。サクラは・・・強いよ。」

サクラ

「だって・・・大蛇丸にだって・・・」

莉奈

「ナイトが言ってた”弱い”はね・・・サクラがグジグジしてるからだと思っの。」

人にばかり頼って、いつかはその人達も倒れて最終的には死ぬ。力無い者は殺され、力ある者は上に立って行く。

だけど、サクラはリーさんが倒れて、ナルトもサスケも負傷で・・・サクラは命賭けで二人を守った。

良い事だと思うよ。ナイトだって”そこは認めてやる”って言うてくれたでしょ？

だから自分を信じて。必ずその願いは叶うから」

サクラ

「・・・うんッ・・・ありがと・・・」

だけど、二人が心配。

歌怨

「雷遁・豪電柱！！！」

すると上からいくつもの稲妻がドスとキンの体にめがけた。

キン

「ゲホッ・・・」

ナイト

「チッ。足が速えー奴だぜ」

ザクという人がナイトの周りを風のように走りながら音波を撒き散らしていた。

ナイト

「糞うぜえー。てか何だよ。この音波」

莉奈

「ナイト！！！！タイミングを計って火遁を使って！！！！」

ナイト

「・・・了解。」

ナイト（１・２・３）

「火遁・炎導豪炎の術！！！！！！」

すると、一気に炎がザクという人に飛び散った。

莉奈

「よし」

その時だった。サスケに掛かってた呪印が・・・発動した。

「「キヤー！！！！」」

思わず、吹き飛ばされそうになる私とサクラ。

それに、ナルトも苦しそうにもがき始めた。

私はナルトの元に急ぎ、抱き抱えて木の上に行った。

莉奈

「ナルト！ナルト！！しっかり！！」

ナイト

「完璧に気絶してやる」

歌怨

「どうする。このままだと、サスケはアイツらを倒しかねないぞ」

莉奈

「だけど、サスケを止める事が出来るのは・・・」

「…ナルト…と…」

ナイト

「けどどうすんだよ!!コイツ（ナルト）は気絶してんだぞ!!」

歌怨

「…どうにも…!!!!」

その時だった。

サクラがサスケに抱きついていて。

まだ、治療中でサクラだって立つのがやっとのはず…なのにサクラは立って、サスケを止めた…。

その光景を見ていたいののは物凄く嫉妬していた事だろうー…w

いの

「サスケ君に泣きながら抱きつくなんて…やるわね^言^」

サクラ

「フンッ。アンタなんかサスケ君は譲らないわよ言へ」

莉奈

「いの!!変な事を話しないで切る事に集中しなさいよ!!」

いの

「はぁーい…」

サクラ

「(ドヤァ)(」

いの

「(イラッ)(」

サクラ

「(」

今のやりとりは見なかった事にしようかな………

＝IN次の日＝

ナイト

「あー…暇すぎだぜー…」

私たちは確かに早く終わったけど、最後まで上忍の話聞いていなかった為…今日はもう中忍試験合格発表場に行く事となった。

そして今はー…長つたらしい廊下を歩いてる所。

私の頭の中にはナルトの事だらけ…

「無事に地の巻物を取れたかなー…」とか「巻物は開けてないよね???」とかとかッー!!!!

莉奈

「はああー…」

歌怨

「…どうした?」

莉奈

「…何でも無い…」

本会場に入ろうとした時だったー…

前から我愛羅達が通って来た。

通って来た…というより、通ろうとしていた。

だけど私を見る我愛羅の目が本当に冷たかった…。

その場を我愛羅が通り過ぎて行った。

（やっぱり私なんか…綺麗さっぱりに忘れちゃったのかな…それなら、あの日…マコト先生との修行が終わって三人でお餅を食べに行こうとして、再開したあの日…我愛羅は確かに小声だったかも知れないけどちゃんと「莉奈」って…じゃあ…なんで…）

ナイト

「まあーいいや。行こうぜ」

中に入るなり…途端に声が鳴り響いた。

??

「かゝおゝんゝくゝん！！！！！」（抱き付く）

??

「ナイト君ー！！！！逢いたかったよー！！！！！！」

ナイト

「火遁・錘艶聞の術！！！！」

解説！！

火遁・錘艶聞すいゑんぶんの術は：

霞炎舞の術と似て、印を組み、口から霧状の物質を吐いて（砂とか石？）相手を攻撃する。

ナイトお得意の錘艶聞の術で二人がもつとも嫌がつている鈴鹿達を蹴散らした。

??

「何するのよっー！！！！」

こっちは狐目鈴鹿。（きつねめ・すずか）

歌怨が大・大・大好きな取巻きの一人。

実力は忍術学校時・ナルトよりも下だった。（今回、生きてる事が奇跡：ww）

??

「でもそんな所がかっこいい……!!」

そして駈^{まだらめ・ゆうか}襲結羽袈

ナイトが世界一で好きだという……

紹介は……これぐらいかな? w

(名前)

「それじゃ……邪魔者は消えるね」

満面の笑みをしながら、私は二人をおいて窓から飛び降りた。
(下
はコンクリート……!!)

ナイト

「キメえーんだよッ……近づくな……! ブスッ……!!」

結羽袈

「ええ……!! (涙目)」

そんな酷い事を言わないでよ……!!」

「IN 莉奈は」

莉奈

「んー！！！！風が気持ちいいー！！！！」

私はこの灯台の屋上に来ていた。

確かに二人の邪魔はしない方が良さそうだったし……我愛羅の事でも少し考えたかったし…。

『我愛羅ッ』

『なあに？』

『大好きッ』

『チュッ（ ）』

『／／／／／／』

今でも甦るあの昔の頃の光景…

（ ）

莉奈（本当、陰が薄いんだからー…）

「そつえば…我愛羅とどんな関係？」

カンクロウ

「兄弟」

莉奈

「はあっ！！？兄弟！！！！？似てなッ！！！」

カンクロウ

「似てないと言われると傷つくじゃん？」

莉奈

「大丈夫b カンクトロウは心の広い人だからww」

カンクロウ

「…（ブチッ。

カラス^言^」

莉奈

「あー!! (汗)

ごめんなさいー!!!!」

カンクロウ

「／／／／／／」

莉奈

「私の顔に何か付いてるの？」

カンクロウ

「(鈍感…じゃん…／／／／／)」

そんなカンクロウの行動が気になりつつも、逢えて無かったかのよう
うに見過ごした私。

放送

『第二試験終了致しましたので、お集まり下さい』

莉奈

「もう…?…まあ第三試験も頑張ろッ」

私が走り出そうとした時だった。

「あのさー……」振り返ると顔を真っ赤にしながら、呼び止めていた。

カンクロウ

「その…第三試験…頑張ろう…みたいな…／／／／／」

莉奈

「…うん！じゃあー、後でね^^」

その後のカンクロウはというと…。

カンクロウ

（俺の馬鹿ッ！！アホ！！！！何やってんだよー！！！！）

と、自分の頭を叩いていた。

莉奈

「到着」

??

「莉奈姉ちゃん！！」

と、言いながら誰かが抱きついて来た。

莉奈

「ナルトー・・第二試験、クリアしたんだね^^」

ナルト

「その通りっー！！姉ちゃんが最初？」

莉奈

「うん^^一日目に終わったよ」

サクラ

「ええー！！私達なんかついさっきだよ（哀）」

莉奈

「そうなんだwでも、それだけ巻物取りに時間が掛かったんだね・
・w」

その時、私は何かを察知した。

誰かが私を見ている…。

でも、誰が？

この冷たい目つき…覚えてる…まさか…

トントン

莉奈

「！…！」

マコト

「どうした？莉奈？そんな顔をして」

莉奈

「マコト先生…。」

マコト

「？？？？」

莉奈

「何でも無いです…。」

* 0 0 8 * 幻覚

莉菜

「きつと何かの幻覚…うん…幻覚だっ！」

と、私は蹲って呪いの呪文のように唱えていた。

ナイト

「はあ？何が幻覚なんだ？」

莉菜

「あー…もうー…最近、目が可笑しいよー（泣）」

ナイト

「はあ？」

と、ナイトは何がなんだかさっぱり分からない様子だった。

莉菜

「もう駄目！頭が回らない！」

と、嘆いていた時、冷たい視線が向けられてる事に気付いた。

視線の先を見ると、腕を組みながら壁に寄り掛かりこちらを見る我愛羅がいた。

莉菜

「あー！！（泣）我愛羅とだけは戦いたくない…」

歌怨

「きつと当たるだろう」

と、地獄耳でもある歌怨が即答で言い返して来た。

莉菜

「100%？」

歌怨

「100%」

莉菜

「だから即答しないでよー（泣）」

マコト

「莉菜。大丈夫だ。お前なら、出来る。そうだろう？」

ナイト

「おい…マコト。ちいっとズレてるぞ（呆）」

歌怨

「ナイトに同感だ」

マコト

「まあ…お前なら、きっと中忍になれる。大丈夫だ。自分に自信を持つんだ。」

「何たって俺の教え子だろ？この俺がついてる限り、お前達は絶対に中忍になれる」

と、言っただけでまさかこの言葉が本当に現実となって、証明されるとは誰もが思わなかっただろう…。

そして一回戦目はサスケの勝ちで勝負は次第に進み、9回戦目に突入した。

九回戦目、ナルト対キバの戦いとなった。

莉菜

「んー…ナルト、だね。勝つの」

リー

「そんなの分からないですよ！！戦ってみないと！！！！」

ナイト

「コイツ（莉菜）の運は良く当たるんだよ。

100%中99？はな。外した事すら、余りねえーから、ナルトの勝ちなんじゃねーの？」

リー

「そんな…」

ヒナタ

「ナルト君…キバ君…」

そして、さっきから嫌な気配がするけど、誰だかはもう百発百中で分かる。

絶対に…この木の葉に、大蛇丸がいる。

だけど他の人達は気付いてない様子…マコト先生や、三代目火影様までも…。

ここは、様子を見るしかないかな…。

（飛ばします><）

残るメンバーは、私と歌怨とナイトと、リーさんとチョウジ。

それに、我愛羅と音隠れが一人。岩隠れが一人で、草隠れが二人残っていた。

私的には、我愛羅と音隠れの人とだけは戦いたくないかな…。

我愛羅は…流石に、戦えないし…音隠れの方は、ナルトたちを襲った張本人でもあり、見る限り大蛇丸の部下だというね…。

だからといって、岩隠れの人と草隠れの人が弱いとかそういうのじゃないんだよね…。

あれこれと考えてる内に電腦掲示板には名前が映し出された。

途端には大声で叫びそうにもなった程だった。

【アマノ・リナVSサタケ・ユウ】

莉菜

「何で!!?」

ナイト

「仕方ねえーだろ。まあ、さっさと行けよ」

マコト

「大丈夫だ。いざとなれば、助けに行くから」

いや、別にそこまで弱くはないかな？

そう思いながら、私は何メートルもある高さから飛び降りた。

着地の際には、少し水が庇ってくれた痛みも和らいだ。

カンクロウ

「お手並み拝見と、行くか」

ナルト

「姉ちゃん！！！！頑張れっー！！！！」

私が笑顔で応えると共に、審判が笛を鳴らした。

ユウ：「俺はユウ。テメエーを倒して中忍になってやる」

莉菜：「アハハハハ……；……；まあ、私も中忍になりたい訳ですしね……」

と、言うときクナイが飛んできた……が、軽々と水が庇い、クナイを破壊した。

ユウ：「土遁・泥胞子……！」

下忍で土遁を……？しかも、上忍レベルの……？

と、思いながらも水・氷が守り跡形も無く土が負けた。

ユウ

「想定外だな……貴様は血継限界の者か……？」

莉菜

「んー…ちょっと違うかな。私は血継限界なんかじゃないよ。私のチームメイトにならいるけどね^^まあ、今度はこっちからやらせて貰うね」

印を素早く結び、口にした。

莉菜

「沸遁…霧氷獄」
きりえいごく

すると一気に私達の周りが、白い霧に包まれた。

きつと二階からはどこに誰がいるのか分かるぐらいに、霧は薄い。

だけど、印を結ぶ事に霧が濃くなっていく。

そして後に、攻めて攻撃をするというのが今回の作戦。

莉菜

「水化の術!!!」

すると、敵の周りに二丁三体の私の水分身が現れた。

相手は気付いてない様子。それどころか、視界が見えなくて困っている様子だった。

莉菜

「水遁・豪水腕の術!!」

一気に腕に水分を集め、それを敵に向けて発射した。

前後左右からも強烈な水を食らい、おまけに視界がゼロで身動きも取れなく、霧を消し去ると相手は気絶していた。

莉菜

「簡単に終わっちゃった（ボソ）」

ハヤテ

「天野莉菜、勝利」

印を組んだ状態で、胸の前に当てると体が水となって消え、その水がマコト先生たちの元に行き、元の姿に戻った。

ナイト

「もっと斬新にやろーぜ？龍駕刀とかさ、使えば良いだろ？」

莉菜

「絶対に駄目だってば！初代水影様が私に託した大事な刀なんだから！ー！」

ナイト

「んじゃー、いつ使うんだよ」

莉菜

「いつかは必ず使うよ」

そついうと、ナイトに頭を殴られた。

莉菜

「最低ー！！！！女の子を殴るなんて！！！！」

ナイト

「貰った刀をいつまでも使おうとしねエーからだろーが！！！！」

莉菜

「大事な大事な大事な刀なんだよ！？」

歌怨

「五月蠅いぞ。お前ら。そして、ナイト、次だ」

歌怨の言葉に、私とナイトが電脳掲示板を見るとそこには【ナイトVSオダギリ】と書いてあった。

ナイト

「おっしゃー！！暴れられるー！！！」

オダギリ

「か…フツ」

上では…。

歌怨

「草と、木ノ葉か…。あれは完全に馬鹿にされてるな」

莉菜

「うん。同感。だけどナイトが勝っちゃうと思うんだよね…」（てことはあの額宛は、岩隠れか…）」

マコト

「だな…まあウチのナイトが負けるはずは無いしな」（ドヤ）」

つと、何か草隠れの上忍さんに向かってドヤ顔だったような…気がするんだけど…www

ナイト

「火遁・炎爆弾の術！！！」

オダギリ

「甘い甘い！！！」

ナイト

「ちょこまかと動きやがって…」

オダギリ

「付いてこれるか？まあ無理だろうなwww」

ナイト

「それは…どうかな？？」

そう言い、素早い印を結ぶナイト。

莉菜

「ええ???まさかのアレを口寄せしちゃうの!!!?」

ナルト／サクラ／リー

「あれ?／つて?／つてなんですか?」

歌怨

「だな…。あのオダギリって言う草隠れの奴は終わるな」

ナイト

「口寄せの術…狼雷暴!!!」

するとナイトの周りには十数匹の狼が現れた。

オダギリ

「なんだ…あれは…」

ナイト

「狩りの始まりだッー!!!行け!!!」

闇月忍法・豪華水煙?轟!!!!」

すると十数匹の狼たちが一斉に、敵の元に向かい、オダギリって言う人は逃げる隙もなく、狼たちに捕られえられ、ナイトの火遁で決

めた。

ナイト

「見たか！！俺の狼たちを！！！」

莉菜

「はいはい。見たよ。早く上って来たら？」

ナイト

「棒読みしやがって！！！」

そんな頃…反対側にいた、我愛羅たちかというと…。

テマリ

「あの男も結構やるじゃないか…」

カンクロウ

「任務の邪魔されたら最悪だけどな。まあ、あの女の力も大抵、見れた事だしな」

我愛羅はただじっと、冷たい眼差しで誰かを見ていた。

その視線の先には――。

莉菜

「あそこで負けてれば、一楽のラーメン、14人分奢る約束だったのにな」

ナイト

「んだよそれ！――ってか俺は見事に、蹴りを付けたじゃんかよ！――めんどくさがりでもな！――」

莉菜

「だからこそだよ……全くもう……確か一楽って一つ、650円だよね？それを16×650だから――」

歌怨

「10400円だな。調度小遣いも無くなるみたいだしな。お前に取っては持つて来いの物じゃないのか？」

ナイト

「ぜってー嫌だ！――ってか、俺の金が――」

カカシ

「ナイト君、奢ってくれるなんて……嬉しいな」

ナイト

「嫌だ!! ぜってー!!!!」

という、他の人たちから見れば楽しそうな会話で羨ましいというの
もあつたかもしれない…。

私は分からなかった…。

どうして我愛羅はあの時…私に…『逃げて』って言ったんだろう…。

そして人が変わったかのように『君は殺さないから』と言ったあの
言葉は…何なの？

それに…どうして再開したあの時、あなたは私の名を口にしたのー
…？

私には分からない…貴方が何を考えてるのかも…

ねえ…昔みたいに笑ってよ…。

お母さんが私たちにくれたあのペンダント…私は大事に今でも、肌

身離さず付けてるよ…

だって、このペンダントは…貴方と私の唯一の繋がりだから…。

009*我愛羅の戦い（前書き）

途中から莉菜 莉那に変更しました

009* 我愛羅の戦い

続いて…今度は歌怨の番だった。

歌怨は物凄くやる気が無い…というより、早く終わらせようとしていた。

おまけに今から戦う相手の女の子が…すごいオドオドしてるから…すぐ倒されそうだな…うん。

ナイト

「少しは手加減しろよな？」

歌怨

「帰って命取りになるだろ」

そう言つて歌怨は印を結び、黒い霧とともに下に下りていた。

ナイト

「何が“帰って命取りになる”だよ！！！！こっちは言つてやったのによー」

マコト

「そうだな…って莉菜、何をしているんだ?？」

莉菜

「何か…あの子、強い」

私は印を組む状態で目を閉じて、意識を集中させていた。

さっきからあの子の回りに変な物を感じてたんだよね…。

流石は十尾の力+チャクラ…それに、天野一族の力。

こんな事までも出来ちゃうんだね…。

ナイト

「どういう意味で強いんだ?」

莉菜

「…歌怨が手加減したら…殺されるに違いない」

ナイト/マコト

「!?!?!?」

莉菜

「あの子の体の周りに何か変な物が見えたの。
今の”急襲裏紅”という天野一族の術を使って見たの・・・。
そしたらー…あの子の周りには死神がいるの。それも二丁三体だけ
じゃない…」

マコト

「なんだと！？?!」

あの子…もしかしたら…樹影家の子かもしれない…。

莉菜

「樹影家…」

ナイト

「樹影？何だそれ？」

莉菜

「話は後。劉冬眼」

続いてナイトも目を閉じて、印を組んだ状態で胸の前に手をやった。

莉菜

『歌怨…歌怨…』

私の言葉に気付いた歌怨が私たちと同じ事をしていた。

それに気付いたナルト達是不審に思い始めた。

莉菜

『歌怨…手加減無しで戦うのを薦める。

あの子、見かけによらずやばいものを身にまってるよ！…！…！』

歌怨

『やばいもの！…！…！？』

ナイト

『死神らしいぜ。さっき俺が言った言葉、選言撤回だ！…！』

歌怨

『ああ…つまりは手加減をすれば…命取りになる、ということか？』

莉菜

『その通り。あの子は…樹影家の子孫かもしれない。…いや、子孫

に違いない。

昔、天野家と樹影家は対立家でもあったの。ちなみにこれも劉冬眼で見た映像ね。

その当時、天野家と樹影家はどちらの家柄が強いかに競い合っていたらしいの。

劉冬眼・龍樺眼りゅうとうがん りゅうかがんを開眼させた天野家は、完全有利だったの。

その成果、完全に敗北に近かった樹影家は家柄のプライドとして…ある恐ろしい計画を考え出したの。それが“死神呪霊”。

死神を召喚させて、相手の懐を付いて命を奪う…必ず息をしなくさせるぐらいに殺し上げる…。

だけど死神呪霊をするには感情を捨てる…という試練があったの。今で言う…霧隠れの“悪習”って奴だね。劉冬眼で見た限り、生徒同士とかでは無く、一家で殺し合いをする事らしいの…そしてあの子は家族である大切な人たちを殺し、死神呪霊を成功させたに違いない」

私が説明し終わると、歌怨は写輪眼を発動させた。

ナイト

「成程…」

莉菜

「この勝負…どうなるかは分からないかも…」

ナルト

「何が分からないんだ?? 莉菜姉ちゃん??」

莉菜

「……この勝負の事だよ。…（ボソ）…死者が出なければ私も嬉しいんだけどね…」

ナルト

「???」

ナイト

「小声で怖いー事言っなよ（呆）」

ハヤテ

「それでは…勝負を始める!!はじめ!!!!」

その言葉と共に敵の樹影家の子孫でもある女の子の目の色が変わった。

そして性格も変わったかのように、人も変わった…。

樹影

「てめー何かひと振りで終わらせてやる!!!!」

そう言い、腰から大きな刀を出し、歌怨に向かって振り下ろした。

だけど歌怨は雲分身を作り、いろんな場所に移動しては消えた…。

樹影

「ちょこまかと動く糞ハエが……!!」

ナイト

「確かに見かけに寄らず……って奴だな……俺、ああいう奴無理だ^q
^」

莉菜

「あの歌怨が平然でいられるのも凄い事なんだけどね。。。」

ネジ

「何だ……アイツのチャクラ量は……」

莉菜

「チャクラ???歌怨の事??」

ネジ

「いや……違う……敵の方だ……」

ナイト

「敵??！」

急襲裏紅をまた使う事になりそう……

マコト

「莉菜…頼む！」

そう来ますよね…

莉菜

「きゅうしゅうせうじやく急襲裏紅…!!！」

同時に劉冬眼を発動させ…見た物は…

樹影と言う人の周りに…砂が沢山巻かれていた。

どういう事…!!？

莉菜

「…!!？まさか…!!！」

私の勘は何となく当たっていた…反対側の所で…我愛羅の瓢箪から砂が漏れ出していた。

きっと我愛羅は砂を使ってあの樹影って人の動きを止めようとしていた。

だけど確か…参戦は駄目なはず…!!

ナイト

「なんだよ?」

莉菜

「ナイト!!!!力を貸して!!!!」

マコト

「何をする気だ!」

莉菜

「…我愛羅を止めないと…あの子が殺される!!!!」

マコト先生は物凄く驚いていた。

それにナイトは一瞬、驚いていたがニヤツと口角を上げて「ああ。良いぜ」と言った。

マコト

「だが…参戦は禁止のはずだ…どうやってやるつもりだ…」

莉菜

「ナイトの忍術で…カモフラージュすれば…私の水は見破られないはずです」

ナイト

「成程。…まあ、任せろ！！闇月一族にしか使えないカモフラージュでアイツ（我愛羅）の砂と戦わせてやるよ（ニヤ）」

莉菜

「勘が鋭いのも良い事だね。私、そこまで言っていないんだけどね…」

ナイト

「まあまあW行くぞ！！」

そついうと、私とナイトは目を閉じて印を組んだ。

そして組んだまま、胸の前に持ってきて私とナイトは意識を集中させた。

ナイト

「行くぞ、莉菜」

莉菜

「OK…いつでもよろしく」

ナイト

「闇月忍法・孔雀惣寿」

莉菜

「（水！！）」

私の考えを理解した水と氷が砂に向かって進んでいった。

その上からナイトの忍法で水と氷は透明になりつつ、砂の刃を止める為近づいていった。

それに気付いた歌怨が、黒い霧を使って霧絨毯きりじゅうたんを作り、地上から見

ていた。

樹影家の子の足を捉えようとしていた砂を、水がドロドロに柔らかくした。

それに気付いたのか、砂の大群が襲ってきた。

それを守るかのように今度は草が地面の中から出現し、包丁で何かを切るかのように尽く消し去っていった。

我愛羅：「……………邪魔しやがって」

テマリ：「？」

莉菜

「（水遁・轟邱?!?!?!）」

そう心の中で唱えると、砂に水の馬車が追突した。

水に負けた砂が固まって、次第には砂が引き下がって我愛羅の元に戻っていった。

ナイト

「ふう…終わったな」

ゆっくり目を開け、ナイトが笑顔を浮かべながら私の方を向いてきた。

それに続いて私も印を組むのを止め、ナイトと同じ事をしていた。

歌怨

「黒霧落刹！！！」

すると黒い霧の中から雷が、敵に堕ちて見事に意識を失ったらしい。

ハヤテ

「勝者、音殺歌怨！！」

ナイト

「お。歌怨も勝ったのか」

莉菜

「おめでとう！！」

すると歌怨が照れながら「ありがとう。」と言っていた。

そしてまた次の対戦名が発表された。

（飛ばします><）

虚しくも…チヨウジはすぐに勝負が終わって最終戦に入った。

それは…我愛羅とリーさんの対戦だった。

我愛羅は、砂を使って下に移動していた。

リーさんもやる気満々だったけど、私は心配で行く前にリーさんを呼び止めた。

リー

「り…莉菜さん／＼／＼」

莉菜

「リーさん…！！危ないと思ったらこれを飲んで下さい…！！」

テンテン

「これ、何？」

莉菜

「耳元で）これは、私が作った回復薬です！！それに予てこの中には回復・負傷を治す薬でもあるんです！！！」

絶対に我愛羅がリーさんを生きたまま返らせるはずが無いと思います！！！！

ですから本当に危ないと思った時は止むを得ずに飲んでください！！！！」

リー

「は……はい！！！！／／／／」

我愛羅

「まだかッ！！！！」

リー

「余り敵を待たせない方がよさそうですね……では、行ってまいります！！！！」

そう言い、戻っていくリーさん。

テンテン

「何を言ってたの??」

莉那

「内緒」

テンテン

「ええー！！！！教えてよー！！！！」

莉那

「無理ーｗｗｗｗ」

そう言いながら歌怨達の元に戻る。勿論私は走ると睨まれそんな気がして水を使つて瞬間移動をした。

ナイト

「何やってんだよ……お前は……」

莉那

「何って？負傷者を出さない運動だけど？」

ナイト

「……はいはい。俺はもうそれ以上言わねーよ」

莉那

「何その呆れた返答……」

歌怨

「…莉那、試合を見なくても良いのか？」

と、歌怨に言われてナイトへの質問は途中でやめた。

それと同時にハヤテさんが笛を鳴らし、リーさんが得意の体術で突っ走っていった。

だけど…全て、砂の盾で邪魔をされて攻撃どころか我愛羅に触れられない状態だった

リー

「はぁッ！！！」

ナルト

「糞ッ！！あの砂の盾をなんとかすれば…勝てるのに！！！」

我愛羅は…あんなに甘いハズが無い。

絶対にリーさんを無事に帰らせるはずが無い。

殺意と憎しみでしか…今はそれしか考えてない…我愛羅の事。

私があの手を渡したとしてもリーさんは使わない…か、

我愛羅に壊されるか…のどっちかしか無いと思う。

仮にもリーさんが飲んだとしても…我愛羅はそれを見て…殺そうとするに違いない。

まあ、私が蘇らせれば良い話…。

だけどその人を使う気持ちが強ければ…の話なんだけどね…。

そんな事を思っているとリーさんが突然、足から変な者を取り始めた。

歌怨

「両方10tもする重りか…」

と、三人してマコト先生の方を見る。

マコト

「なっ…なんだよ…!!」

ナイト

「アイツ（リー）は10…なのに俺らは30とか酷すぎじゃねーのか？」

マコト

「…良いんだ。私の教え子だからな…それぐらいの事は…!」

莉那

「ただ単に…マコト先生の趣味で付けたんですよね？」

マコト

「…!!?…!!」

歌怨

「そうなのか…やはりな」

莉那

「うんvv 劉冬眼で先生の話を聞かせて貰いました」

ナイト

「こんな上忍、ありがよ」

マコト

「何の事だか…」

歌怨

「“こんな事まで分かるようになったとは…危ない危ない” そういう事ですか…」

マコト

「何故私の心の声を??！」

莉那

「それも私の劉冬眼と歌怨の写輪眼で」

マコト先生は思った…。

『こいつらは…危ない』と。

って言うか試合…!!

気付くと…リーさんが包帯を取っていた。

リ

「表蓮華——！！！！！！！！！！」

（お願い！！！！）私はそう唱えながら自分の手を握って祈っていた。

お願い！！

（ドッカーン！！！！）

我愛羅は物凄い音を立てて地面に衝突した。

我愛羅は驚いた表情をしていて、体に物凄いヒビが入っていた。

י

「手応え……あります」

すると横から「よっしゃー！！！！！！！！」という声に驚く私。

誰もが喜ぶ中……私は嫌な予感がしてたまらなかった。

私の勘は当たった。

見る見る内に我愛羅の体が砂となって、割れていった。

リー

「何!!?」

そう…あれはただの砂の抜け殻だった。

やっぱり…我愛羅がこんなに簡単にやられるはずがない。

あの時だって…上忍を…15人程度いた上忍を砂で殺した…。

それと同じように…簡単にやられるはずがないよ…。

するとリーさんの後ろから我愛羅が現れた。

でも…あれは…あの時の我愛羅…。

10年前…我愛羅が夜叉丸さんに殺される数分後に…目覚めたもう一人の我愛羅…。

上忍達を簡単に砂で殺したもう一人の我愛羅…。

そう思うだけで体の力が抜けそうになった。

ナイト

「おい！！莉那！！大丈夫か？！」

莉那

「…ッ…駄目…」

ナイト

「は？…」

莉那

「リーさんが…殺される…」

歌怨

「どうした？」

そう言った時だった。

我愛羅が不敵な笑みを浮かべて、印を結んだ。

するとリーさんに砂が炸裂した。

今度は砂の海がリーさんを襲った。

駄目だ…助けにいかないと…

歌怨

「何だあれは…」

莉那

「あれは…“流砂瀑流”…」

その技は小さい時、私と我愛羅が二人で考えた技でもあった…。

私は“流水瀑流” 我愛羅は“流砂瀑流”

二人で考えた大切な技…なのに我愛羅は…殺しに使おうとしてる…
どうして!!

大切な人を守る為の術だって…あの時、約束したのに…！！

我愛羅：「フツ」

そう不敵な笑みを浮かべ、また印を組み砂で攻撃を仕掛けた。

そしてリーさんは表蓮華の衝動で、避けてガードするのが精一杯だった。

私はハッ！と気付いた。

確か…試合が始まる前、リーさんに渡したあの薬…！！

すると、テツパイプを握って叫んだ。

莉那

「リー……さ……ん……！！！！！！！！！！」

リー

「り……な……さん」

我愛羅

「…!?!」

莉那

「薬ー!?!?!飲んでください!?!?!」

テンテン

「薬?」

テマリ

「薬だと?」

するとリーさんが笑みを浮かべ、蓋を開けて飲もうとした時だった。

また我愛羅の砂が邪魔をして、…ガラス事、壊された。

予想はしてたけど…ここまでやられるとはね。

だけどリーさんの方を見ると、いつもの笑顔に戻っていて「ありがとうございましたッ!?!?!」と会釈しながら言っていた。

莉那

「はあ…良かった…一滴でも二滴でもそんなに効果は無いけど…時間を費やしてくれるから…やっぱり薬の研究、しといて良かった…」

そんな事を言っても我愛羅の攻撃は止まりはしなかった。

だけど…リーさんが…禁術ともされてる…裏蓮華をやるうとしていた。

それをリーさんは、開門・休門・生門・傷門・杜門までを開門した。

我愛羅：「なんだと!？」

するとリーさんは俊足で我愛羅をまた蹴り上げた。

歌怨

「上だ!!!」

リー

「また砂の鎧ですか…それでは来れでどうですか!!!」

するとリーさんは我愛羅を二人、いるかのように蹴っていた。

我愛羅：「砂縛柩……!!」

リー：「うわあああああッッッ……!!……!!……!!」

莉那：「リーさん……!!」

そしてまた……砂の大群が……リーさんを襲おうとした時だった。

皆：「!?!?!?!?!」

我愛羅：「なぜだ……!!」

私は……我慢しきれず……リーさんの前で庇うようにして、水を守りにして立っていた。

莉那：「我愛羅……もうやめてッ……!!」

ナイト／歌怨

「莉那ッ……!!」

莉那：「何でッ…何でこんな事するの！？ねえッ！！！」

次第には頬を伝って大量の涙が溢れてきた。

莉那：「どうして変わちゃったのッ！！！」

ナルト：「姉ちゃん…」

我愛羅：「……ッ……」

サクラ：「莉那…」

すると我愛羅が頭を抱えて、苦しみ出した。

我愛羅：「何故…何故助ける！！！」

莉那：「リーさんは！！！！リーさんは…木ノ葉の…大切な仲間なの！！！」

我愛羅：「なか…ま…だと…！？」

莉那：「それでも…我愛羅がこれ以上…やるって言つのなら…私を殺してッ！！！」

皆：「！？！？！？」

莉那：「我愛羅はあの時言ってくれた！！！！“認められなくても良い。だけど大切な仲間を守る”って！！！！だから私も…大切な仲間を守り通す！！！！！」

我愛羅：「……………」

テマリ：「大切な…仲間？」

バキ：「（我愛羅には…到底、分からないだろうな…）」

すると砂の盾も、瓢箪の中に戻っていった。

そして我愛羅は立ってどこかに向かっていった。

我愛羅：「止めだ…」

莉那：「…………ッ…………」

ハヤテ：「勝者、我あ…！？」

後ろを振り向くと…意識を失いながらも立っているリーさんがいた。

リーさんは懸命に歩いていた…でも、私の前まで来ると気を失って倒れてしまった。

その体を支えて、私はリーさんの体を直し始めた。

医療：「後はこちらでやります…！」

莉那：「はい…」

ナルト：「姉ちゃん…！」

ナイト：「莉那…！！お前、何であの術を使ったんだよ…！！」

リーさんの元にナイト、ナルト、ガイ先生が駆けつけた。

莉那：「……………私はだいじょうぶ……」

そう言ったつもりでも……私も意識を失って、ナイトが体を支えてくれた。

ナルト：「姉ちゃん……！しっかりしろよ……！姉ちゃん……！」

ナイトは……私の体を支えながら、ゆっくりと地面に寝かせようとしていた。

ナルト：「おい……！閻月……！姉ちゃんはどうなったんだよ……？」

ナイト：「黙ってる……！」

ついに怒ったナイトがナルトの方を睨みながら怒鳴った。

ナイト：「少し……黙ってる……！」

それだけ言うと、片手で印を組み、二階のマコト先生達がいるとこ

るに移動をした。

歌怨：「まさか…飛び込むとはな…」

マコト：「莉那が言っていた…あの言葉は…一体…」

ナイト：「……………」

歌怨：「あの日もそうだったよな…中忍試験、前日辺りに餅屋に行こうとした時…俺たちはそこでナルト達の喧嘩に入り込んで…その時、莉那が砂の奴らに向かって言った。その時もあの砂漠の我愛羅がいた。そして何か小声で言うつと莉那は俯いていた」

マコト：「そんな事が……」

ナイト：「…俺のただの勘だと思っただけどさ…莉那とアイツ、小さい頃とか…出会って何かが起きた…って事なのか…？」

サクラ：「？」

カカシ：「どういう事だ？」

ナイト：「余り期待はしない方が良くけど…ずっと前に莉那が言っていたんだ。」

“分かってもらいたい、大切な人がいる”って…。

それにさっきも“どうして変わったの”と、アイツに問いかけていた。

普通だったらアイツ（我愛羅）はどんな奴だろうが攻撃をするはず…なのに莉那にはしなかった。

それにアイツが使っていた“流砂瀑流”って言う技も知っていた。

普通ならそこまで知らないはず…なのに莉那は知っていた。それに歌怨の試合の時も砂を草・水・氷を使って歌怨の手助けをしていた…」

009*我愛羅の戦い（後書き）

魔歩です！！！！

たまにDSiからやるときがあります……；

文章が短かったり、途中で区切れていたら「ああ……なるほど……」的な感じで軽くスルーしてくださいww

それでまたPCで更新する時にはコピーとかして前の奴に繋がたりしますのでww

010* 我愛羅の行動（前書き）

そして、無事第三の試験・予選も無事に終わり

010＊我愛羅の行動

猿飛：「これから本戦の説明を始める」

ナイト：「莉那？大丈夫か？」

莉那：「何とか…」

あれから、十尾の力も貰って早く回復をした私だった。

でも、これで中忍になれるんだね…。

猿飛：「本戦は諸君の戦いを本戦で晒す事になる」

その頃…私の分身は、カカシ先生と一緒にサスケの所に向かっていった。

火影様の話は始まる前に、カカシ先生に頼まれて分身を出しておいたんだよね。

ナイトと歌忍は完璧に見破ってると思うんだけど…マコト先生も上

で見守ってくれてるし。

カカシ：「やはりか…」

莉那：「カカシ先生…」

私とカカシ先生が目を合わせると私の分身が水になり、サスケの元に向かった。

劉冬眼で見ていたけど…カブトって人がサスケを殺しかねない。

（ ）

莉那：「まさか大蛇丸がサスケを狙うなんて…」

カカシ：「まあ…呪印も付けたの、大蛇丸っぽいしね」

莉那：「……………」

（IN予選会場では）

猿飛：「アンコが持つてる箱の中から一人一枚、取るのじゃ」

え？10？？

ナイト：「俺、12」

歌怨：「15…か」

響：「左から順に教えろ」

（
）
）
）

莉那：「10です」

ナイト：「12」

歌怨：「15」

？：「11」

? : 「13」

? : 「16」

猿飛 : 「これはトーナメントでもあるんだ」

と、言い見せられた紙に…

莉那 : 「（滝隠れの人か…）」

ナイト : 「マジかよ…また草かよ…」

歌怨 : 「滝か…」

それも私の相手は、物凄そうな刀を持った馬鹿力っぽい人。

ケモリ・ゴウジって言う人だった。

おまけに滝って…。

っていうか…我愛羅とナルトと同じブロック…。

最悪ッー！！！！

って…もし、私が勝つたら…ナルトか、我愛羅と当たるって事？

ナルトは極力避けたいんだよね…。

大事な弟だしさ

草：「質問。スリーマンセルのチーム内で当たる事はありませんよね？

例えば…砂の人達とか木ノ葉の10・12・15の人たちとか…」

猿飛：「安心せい。当たる事はないぞい」

ナイト：「おっしゃー！！」

歌怨：「…お前は俺と莉那、どっちと戦いたくないんだ？」

ナイト：「即答」勿論お前だッ！！！」

その後、何でか知らないけどナルトとエビス先生と一緒に風呂場で修行をする事になった。

エビス：「まずは足の裏にチャクラを執着させるのです！！」

莉那：「…はあ…」

ナルト：「やってくれないと分かんないってばよ！！！」

エビス：「ふむふむ。では、お手本に莉那さん、やってみてください」

莉那：「…（何で私が…）」

と、そんな事を思いながらやる気の無さそうな表情を浮かべて印を胸の前で組んで、目を閉じた。

<<ボオオオンッ！！！！>>

ナルト：「おっとととと！……どわあッ！……！」

ナルトがまた失敗をして、湯の中に落ちそうになった時、水が庇って助けてあげた。

莉那：「ナルト、良い？ちゃんと聞いててね。」

御湯の上を歩くには一定量のチャクラを流し込む。はい、やってみて」

ナルト：「……………こうか？」

莉那：「そう。次に御湯に片方の足を付けて、自分の体重とかでの重さの量を考えて下に流し込む」

ナルト：「どわあああッ！……！！……！」

莉那：「だからー！！……ゆっくりやらないとやらないと駄目でしょう！！……！」

そう言った時だった。

自来也：「にしても君…可愛いのか？」

片手で印を組む状態で目の前に持ってくると、煙とともに数足ライオンの獣が出てきた。

莉那：「自来也さん。出来ればナルトの修行の手伝いをしてもらえませんか？」

見て貰うはずの上忍さんも貴方に倒されちゃった訳ですし…」

自来也：「おう！…任せとけ！！！（糞…獣どもめ…）」

ナルト：「姉ちゃん、サンキュー！！！」

自来也：「姉ちゃん？お前らは姉弟か？」

莉那：「違いますよ。義理の姉弟です。私は天野莉那。こっちは…」

ナルト：「うずまきナルトだってばよ！！！！」

莉那：「両親が小さい頃、亡くなって今は私がナルトの面倒を見て

いるんですよ」

自来也：「そうか…。」

（浜辺にて）

莉那：「そう！…その調子で水の上に乗ってみて！…」

ナルト：「お…おう！…！」

あれから…色々という色々な事があって、説明したくないぐらいの事が起きた。

それでも自来也さんはナルトと私の修行を見てくれるということ、今は、ナルトと一緒に水の上で修行をしていた。

莉那：「そう！…そのまま歩いてみて…ゆっくりね」

ナルト：「こっか？」

私が笑顔で答えるとナルトが馬鹿みたいに大はしゃぎをして喜んで

いた。

その間に私は靴とかを履きに自来也さんの所に行っていた。

自来也：「嬉しそうじゃのー」

莉那：「はい…一時はどうなるかと思いましたけどね…」

自来也：「…変な事を聞いても良いか？」

莉那：「はい？構いませんけど…」

自来也：「ナルトは…九尾の封印をされているのじゃろ…」

莉那：「…自来也さんが言う通りです。そして私は…十尾の人柱力です」

それを聞いた自来也さんが吃驚していた。

自来也：「十尾だと！？確か…九尾までのはずじゃが…」

莉那：「…これがその封印ですよ」

そう言い、右肩付近にある黒い封印を見せた。

自来也：「確かに…九尾の封印と同じじゃな…まさか！！！！10年前に木ノ葉で起きた事件…」

莉那：「九尾の妖狐の…事件ですよ。私もその時、いました…。と、言っても昔の記憶は覚えていないんですよ…。ほとんど、劉冬眼で見ていたので…」

自来也：「そうか…」

それから…修行後の疲れということで、御湯に入る事にした。

勿論私は二人から離れた所でエンテイを口寄せしていた。

それに、4足の野獣たちも一緒に口寄せをしていた。

だってね…自来也さんに見られたら

それにこの子達は良く鼻が効くしね。

『お前は強くなつていつてるな…』

そう？ありがとう、十尾^^

何かアカデミーに通つてた時、話かけようとしてたんだけど、どうも無視されっぱなしで…

だけどたまに十尾の方から話かけてきて今では中が良いいんだよね w w

十尾も素直で本当、頼もしいしね

* I N 夜 *

莉那：「やっぱ夜って最高」

そんな事を言いながら屋根の上を飛び越えていた。

ってあれ？ハヤテさん？

そう思って近づいた時だった。

ハヤテさんが剣を持って砂の人に向かっていった。

ただど惜しくも砂の人がそれを間に受け、殺されそうになった時に
だった。

莉那：「やめてください！！！」

砂の：「ほう…君は…我愛羅の攻撃を阻止した…」

莉那：「こんな夜中にどうしてハヤテさんを殺そうとするのですか
？」

砂：「いえいえ。そんな事はしませんよ。このお方はお返しします
よ」

そう言って、ハヤテさんを物のようにこっちに向かって投げてきた
けど…

水がそれを尽く受け止めて、私の近くで寝かせた。

砂：「そうそう・・・言っておきます。

我愛羅とはどんな関係か知りませんが…これ以上彼に近づかない方が良いでしょう。

彼は君を殺すかもしれませんが…。それに彼にとって君はただの知り合いですかね」

莉那：「そんな事…無い!!!」

我愛羅は殺したりなんかはしない!!!」

砂：「何故そう言い切れるのかね？」

莉那：「私は…我愛羅を…信じてるからッ!!!」

我愛羅にとつてただの知り合いでも…私にとつては…大切な人!!!
!!!

絶対に殺しはしない!!!」

砂：「ほう…信じてる…ですか。例えば彼が化物だとしても、大切な仲間だと言えるのですか？」

莉那：「……………」

『いやああああッッ!!!!!!!!!!!!!! 莉那、逃げてッッッ!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

『お母さんッッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

莉那：「……言える!!!!!! 我愛羅は化物なんかじゃない!!!!!! 貴方達がそう言うから……我愛羅は!!!!!!」

砂：「そんな綺麗事を!!!!!!!!!! 死ねッッ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

そう言った時だった。水を庇いに付けようとした時……砂の人が宙に浮いていた。

砂がその人の首を力強く縛っている事が分かった。

そして私の前に我愛羅が現れてその人を睨んでいた。

我愛羅：「……莉那に……手を出すなッ!!!!!!!!!!」

莉那：「我愛羅!!!!!!!!!!」

だけど我愛羅の砂が本当に我愛羅の上忍でもある人を殺しそうになった。

莉那：「やめて……もういいからッ……！」

我愛羅：「まだだッ……！！！」

バキ：「うわああああッ……！！！！！！！！！」

莉那：「我愛羅ッ……！！！！！！！！！」

そう叫んで我愛羅が上げている方の腕を下ろした。

莉那：「もう……やめて……お願い……だからッ」

そう言うと砂が見る見る内に我愛羅の瓢箪の中に戻っていった。

そのまま息を切らしながら砂の上忍が戻っていった。

私は掴んでいた腕を離して、ハヤテさんの元に向かった。

だけど…私が出るのが遅かったのか…大量出血をして、もう死んでいた。

私がハヤテさんを蘇らせようとした時、右腕を掴まれた。

我愛羅：「むやみに人を蘇らせるな」

私はその手を振り払うようにして、腕を左右に振った。

莉那：「どうして!!! 何で私がやろうと思った事に邪魔するの!」

我愛羅：「……昨日、それで意識を失っただろ。」

莉那：「……………」

我愛羅：「何があつたかは…知らないが…やめておけ」

莉那：「……………そのままに……………しておけとも言つもの?」

我愛羅：「他にどうしろと言う訳だ？」

莉那：「……………」

我愛羅が腕を組んでそのまま、どこかに行こうとした。

莉那：「…我愛羅…ありがとう。助けてくれて…」

そう言った。さっき、…助けて貰ったしね。

そう言う和我愛羅が一度止まって、それでまた歩きだした。

(IN当目)

莉那：「ああ……………寝坊……………」
「……………」

只今…10分寝坊した。

すぐさまナルトの部屋に行くと、ナルトがクマの付いた顔でこっち

を見てきた。

莉那：「ナルト…生きてる？」

ナルト：「なんとか…」

って違うッー！！！！！！

莉那：「あー！！！！ナルト！！！！早く起きて朝ごはん食べていくよ！！！！」

ナルト：「ああー！！！！！！そうだったー！！！！！！！！！！いけねッー！！！！」

それから…素早く朝ごはんも食べ終えて私たちは本会場へと向かった。

011* 第三試験、暗殺（前書き）

無事、会場に到着したナルトと莉那。

だけどそこには…見たくもなかった人がいたのだった…。

それは、六年前、我愛羅を暗殺しようとした…我愛羅の父親でもある風影様がいた…。

011* 第三試験、暗殺

莉那：「何で…風影が…」

ナイト：「何か同盟だからとき。ってか風影じゃなくても良くね？」

歌怨：「砂の奴らに丸聞こえだぞ」

莉那：「馬鹿」

ナイト：「てめーが言ったんだろーが！…！」

莉那：「そうだっけ？」

ナイト：「…はあ…そういえば今日は龍駕刀を腰に翳して、やる気満々じゃん」

歌怨：「今日の相手は相当強いと莉那も思うか？」

莉那：「…一応ね。もし…当たったらって感じで」

すると二人は黙って、何故かお互い、見合っていた。

ナイト：「それって…あの砂漠の我愛羅の事だろ？」

莉那：「……………そう…かもね」

歌怨：「…莉那。中忍試験が終わったら…砂の奴との関係とか教えてくれないか？」

莉那：「……………」

歌怨：「無理に教えろとは言わない…だが、お前が良く悲しそうな表情をするからな…
悩み事でもあったらいつでも相談しろよ」

ナイト：「俺ら、スリーマンセルだろ（ニカ）」

莉那：「…歌怨…ナイト…ありがとう…後で…聞いてくれる？」

「「勿論だ／だぜ」」

私、この二人とスリーマンセルで良かったって…思った。

こんなに和解出来る人たちはそういない…。

本当に歌怨とナイトが同じ11班の仲間で良かった。

試験官：「本戦の前に…トーナメントを少し変えたから…確認しておいてくれ」

それを見ると…一回戦は滝隠れの人で…二回戦目が…カンクロウ？
か草の人？

試験官：「それじゃー、一回戦目はうずまきナルトと…ひゅうがネジだな。

その他の者は上に上がっている。

それと予選と同じでルールは無し。ただどちらかが死ぬか負けと認めた時には終了だ」

莉那：「ナルト、頑張ってね」

ナルト：「おう…！任せろってばよ…！莉那姉ちゃん…！」

ナイト：「とか言って負けんじゃねーぞ。」

ナルト：「余計なお世話だっつーの！ー！ー！」

シカマル：「マジかよ…女かよ…めんどくせー」

莉那：「戦う前からやる気無さそうだねwww」

シカマル：「仕方ねえーだろ。あーあ。最後まで残るんじゃなかったよ…本当めんどくせー」

莉那：「シカマルってさ…」

シカマル：「あ？」

莉那：「必ず言葉の最後には“めんどくさい”が入るよね…まさかの口癖？」

シカマル：「答えるのもめんどくせーよ」

莉那：「何それ？……」

ナイト：「おい。早く行くぞ」

と、ナイトの言葉で待合室に向かっていった。

だけど…行こうとした時、この間、ハヤテさんを殺した砂の上忍に出会った。

通りかかった時、その人は耳元で『この間の事は誰にも言うな。』
と言っていた。

アンタ達がやろうとしてる事は…劉冬眼で見させて貰ったから…。

悪いけど木ノ葉を潰させないから……！

歌怨：「莉那？どうかしたのか？」

莉那：「何でもない…」

＊待合室にて＊

ここはすっごく見所の良い所だった。

それに…人という人があれなんだけどさ…

何で私の左隣がカンクロナ訳？

ものっすごくついてないかもね…。

ナイト：「アイツも良くやるよなー。真正面から行くなんてよww
」

シカマル：「それがナルトなんだしよ。めんどくせーけど、アイツ
の考えはすごいぜ」

莉那：「流石は私の弟だ」

歌怨：「…そうか。よかったな」

莉那：「だってさー！！あんな弟、私は誇りに思うよー！！！！思わない
？」

我愛羅：「……………」

ナイト：「ぜってー思わねー」

シカマル：「…思わねーよw」

歌怨：「さーな」

莉那：「何で！？私はすっごく思っよー！ー！ー」

そう言った時だった。

マコト：「莉那はいるか？」

莉那：「はい？」

マコト：「お。調度良い所にいたな。お前に聞きたい事がある。少し試合観戦は出来ないか…」

莉那：「なんでしょう？」

マコト：「負傷者を治して貰いたいんだ」

莉那：「了解しました」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8073w/>

NARUTO ~ナルトの義理の姉は十尾の最強忍者~

2011年11月26日21時50分発行